



男声合唱組曲
水墨集

露
山寺の初秋
祭
終日風あり
鯨の来る頃
時雨
芦雁
渡り鳥

作詩 北原 白秋
作曲 多田 武彦
指揮 北村 協一

男声合唱組曲 **水墨集**

組曲「水墨集」について

多田 武彦

北原白秋の詩による組曲を、私は今まで、九つ作曲している。

- 1954年(昭和29) 柳河風俗詩
- 1957年(昭和32) 雪と花火
- 1957年(昭和32) 月夜孟宗の図
- 1964年(昭和39) 白き花鳥図
- 1969年(昭和44) 三崎のうた
- 1982年(昭和57) 水墨集
- 1991年(平成3) 東京景物詩
- 1992年(平成4) 思い出('94初演予定)
- 1993年(平成5) 月に寄せる歌('94初演予定)

白秋の詩の、余りにも日本の絵画的な部分に魅了されたらしい。

阪急沿線の清荒神に、鐵齋記念館がある。日本を代表する書家富岡鐵齋の書や水墨画が展示されている。「中国の伝統を守りながらその上に日本人としての独自の境地を拓いた鐵齋の水墨画」は、極めて正統的且つ男性的であり、他の作家のものを見向きもしないほど、私はこよなく鐵齋を觀賞してきた。

カメラや映画についても私は、モノ・クロームのものが好きで、今でもテ

レビのカラー機能をわざわざ0にして見ることもある。

何度も言ってきたが、1949年(私が19才の時)の関学グリー50周年演奏会で、ア・カベラの男声合唱曲をふんだんに聴いたとき、ア・カベラの男声合唱曲のすばらしさと水墨画の美しさがオーバーラップして、私に深い感動を与えた。

小学生の頃から今日に至るまで、書道や絵画が不得手であった私だったが、音の筆致で何とか出来ないものだろうかと思っていた処、「ア・カベラの男声合唱曲を書き続けろ」との作曲家故清水脩先生の助言もあって、今日に至った。

こんなことから、詩人北原白秋の詩集「水墨集」を何時かは作曲してみようと思っていたが、前述のとおり、1982年に実現した。

今回は「私に、音の筆致で水墨画を描く端緒を与えてくれた関西学院グリークラブ」と「指揮も巧いが絵も巧い北村協一先生」との絶妙のコラボで、白秋と鐵齋の世界が広がる。七カ月の闘病生活も何とか終わったので、久しぶりにじっくりと聴いてみたい。

演奏会の成功を祈る。

作詩者 **北原 白秋**



明治18年(1885)1月25日、福岡県山門郡沖端村(現・柳川市沖端町)に生まれる。本名隆吉。家は代々柳河藩御用達として西海の税関を務める海産物問屋で、父の代から酒造を本業としていた。菅原道真直系の子孫との伝承もある、由緒ある家柄だった。

県立伝習館中学(現・伝習館高校)在学中に雑誌「文庫」を知って文学に目覚め、短歌創作を開始、翌年(明治34年)には友人らと回覧雑誌を作る。この時くじで秋の字を引き当て、以来「白秋」と号する。この頃に中学の歴史の教師から西欧文学の話を開き、本格的に詩人を志すようになった。

明治37年(1904)4月、早稲田大学英文科予科に入学。この頃書いた長篇詩が河井醉茗の絶賛を受けて「文庫」詩壇全面を提供され、さらに翌年には「早稲田学報」の懸賞に第1位で当選するなど、華々しいデビューを飾る。

明治39年(1906)、与謝野寛の招きで新詩社に参加するが2年で脱退、その年の冬に洋画家石井白亭らを中心とする美術文芸誌「方寸」の同人らと、新詩社を脱退した仲間と共に「パンの会」をおこす。ベルリンの芸術家たちの同名の芸術運動を真似て始められたこの会は明治44年頃まで続き、白秋ら若い芸術家たちの青春の時代、「疾風怒濤」の時代を形成した。

詩壇では栄光の絶頂にいた白秋だったが、この頃実家が破産、白秋を頼って一家が次々に上京し、生活は苦しくなる。さらに明治45年(1912)姦通罪で告発されるという事件に白秋は大きな痛手を受け、一時は死をも考えた。だがこれを機に、彼の作風はその後期のより充実したものへの転換をみせる。

以後彼の活動はエッセイや小説、そして現在も愛唱されている童謡などあらゆるジャンルに及び、その著作も膨大なものになった。昭和8年(1933)には山田耕筰の依頼で関西学院校歌「空の翼」の作詞もしている。

昭和17年(1942)11月2日早朝、57歳で世を去る。亡くなる直前、部屋の窓を開けさせて、「新生だ」とひとことつぶやいたという。